

博士論文の要旨および 博士論文審査結果の要旨

氏 名 徐 幼 恩

学 位 の 種 類 博士（比較文化学）

学 位 記 番 号 文博甲第11号

学位授与の日付 2014年 3 月17日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

学 位 論 文 題 目 台湾のアジア花嫁

—高雄市における生活適応を中心として—

Asian Brides in Taiwan:

The Life Adjustment Process in Kaohsiung.

論 文 審 査 委 員 主査 小池 誠 教授

副査 Philip Billingsley 教授

副査 青野 正明 教授

<博士論文の要旨>

台湾のアジア花嫁

——高雄市における生活適応を中心として——

徐 幼 恩

序論の第1節では、研究目的と方法を紹介した。本論文の目的はアジア花嫁の生活適応に焦点を当て、台湾社会で直面している諸問題を明らかにすることである。そして、アジア花嫁の生存戦略の分析により、彼女たちは単なる受け身の弱者ではなく、周縁化辺化された立場から脱出しようと懸命に頑張っている能動的な行為者であることを示したい。研究方法是文献調査と聞き取り調査、参与観察を併用した。その中で、高雄市三民区におけるアジア花嫁の聞き取り調査による研究が本論文の中心である。第2節では、日本のアジア花嫁に関する先行研究を紹介し、アジア人女性はしばしば被害者と見なされ、彼女たち本人の主体性や声の欠如という先行研究の不十分な点を指摘した。第3節では、おもに台湾人研究者による先行研究を、研究対象に基づき、1. アジア花嫁、2. 新台湾の子、3. 台湾人夫、4. 国際結婚仲介業者という4つの分類に分けて紹介した。従来の研究は農山漁村の地域に偏っていることが明らかになった。本論文は未だ十分に研究されていない都市部の国際結婚に焦点を当て、その実態の解明に努めた。

第1章「台湾におけるアジア花嫁」の第1節では、アジア花嫁に対するさまざまな呼称と定義を紹介し、彼女らが台湾社会で受けた偏見の背景を明らかにし、本論文ではアジア花嫁という言葉を選択した理由を述べた。

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

続いて、中国と東南アジア出身のアジア花嫁に分けて、それぞれの国際結婚の歴史を紹介した。そして、統計からアジア花嫁の現状を把握した。第2節では、「プッシュ・プル理論」をもとにして、受け入れ国と送り出し国の双方の間に存在している社会的・経済的背景およびアジア花嫁の増加した諸要因を紹介した。第3節では、本論文の主な調査地である高雄市に焦点を当て、高雄市の概況とアジア花嫁の現状、および主な調査地域である三民区におけるアジア花嫁の現況を紹介した。本論文は都市部のアジア花嫁の生活適応を解明するために、台湾で2番目の都市である高雄市を調査地として選定した。

第2章「政府の政策と公益団体の支援」では、アジア花嫁を早く台湾社会に溶け込ませるように、政府や民間団体がそれぞれ行った支援活動を整理した。第1節では、中央政府のアジア花嫁政策の具体的な内容と問題点を述べた。第2節では地方自治体である高雄市政府の支援体制およびアジア花嫁の支援を統括している新移民センターの成立の経緯などを述べた。第3節では高雄市政府が主催する生活適応クラスの現場と、生活適応クラスの担当者から見た支援の問題点および、主催する民間団体の改善すべき点を論じた。第4節では公益団体の支援活動に関して、「南洋台湾姉妹会」の活動経緯および高雄市のキリスト教団体の支援活動を述べた。生活適応クラスの運営、新移民センターの成立などをはじめとするアジア花嫁政策の実行によって、台湾社会は確かに多くのアジア花嫁にとって、より生活しやすい社会になりつつあるが、政策宣伝が不十分なため多くのアジア花嫁は自身の権利に関する現行の政策を知らず、その恩恵を受けることができない現状が明らかになった。また、公益団体の支援はある分野では、政府と地方自治体のアジア花嫁政策に方向と見本を提示した事実が明らかになった。

第3章「アジア花嫁のライフヒストリー」では、アジア花嫁の姿を明ら

人間文化研究 創刊号

かにするために、本人の語りを通して、彼女らが台湾社会で直面したさまざまな困難を明らかにした。第1節では、高雄市在住の7人のアジア花嫁のプロフィールを紹介した。第2節では、結婚生活が継続している4人のライフヒストリーを取り上げ、彼女らは言語の壁と家庭内の人間関係、子育て、ネットワーク、就職という困難に直面した際、どのように乗り越えてきたかを明らかにした。第3節では、結婚が破綻した3人のライフヒストリーを取り上げ、3人の結婚生活が破綻するまでのプロセスと、離婚をめぐる生存戦略の工夫、離婚後の自立の道を明らかにした。第4節では、7人のアジア花嫁それぞれが取った生存戦略を論じた。7人のアジア花嫁の生存戦略の事例から導き出された結論は、彼女らが単なる周縁化された弱者ではなく、自らさまざまなネットワークを用い、困難を乗り越えてきた主体性を持つ女性達であるということである。

第4章「アジア花嫁のネットワーク」では、第3章と同様に、アジア花嫁本人の視点や事例から、彼女らがホスト国である台湾でいかに自分のネットワークを展開してきたかを分析した。第1節ではアジア花嫁の情報交換の場を研究するために、「ベトナム小吃店」と青果卸売業者の事例を取り上げた。第2節では同胞同士のネットワークの展開を考察するために、ベトナム籍花嫁からなる団体の社会活動を取り上げた。第3節ではベトナム籍花嫁と台湾社会との共生を喚起するために演じられたベトナム籍花嫁を描いた演劇を紹介した。本章で取り上げた、ネットワークのキーパーソンとなったアジア花嫁の事例とベトナム籍花嫁の社会活動と演劇に託されているメッセージを通して、国際結婚に関して、当事者であるアジア花嫁と台湾人夫をはじめとする台湾人家族、双方の理解と努力が必要であると同時に、アジア花嫁のネットワークが彼女らの生活適応において、きわめて重要な役割を果たしていることが明らかになった。

結論の第1節では、本論文の主な目的である多くのアジア花嫁が能動的

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

な行為者であることを明らかにするために、7人のアジア花嫁の生存戦略と同胞ネットワークの活動から見た主体性を分析した。第2節では、アジア花嫁と台湾社会との共生のために、本論文の調査結果を踏まえて、政府と民間団体、台湾社会、台湾人夫と家族、アジア花嫁本人対して、それぞれの問題の解決に向けた提言をまとめた第3節では、本論文の内容を総括した上で、研究上不足している点、および今後の研究課題を述べた。

以下に、結論の内容を詳しく紹介する。近年急増した「アジア花嫁現象」と共に、生活適応と「新台湾の子」の教育問題、その家族をめぐる問題など、さまざまな社会問題が浮上し、諸問題の解決は政府の急務とされる。アジア花嫁と台湾社会との進む道を考えるためには、アジア花嫁の生活適応の調査が極めて重要だと考え、本論文は都市部の国際結婚に焦点を当て、高雄市在住のアジア花嫁の生活適応を中心に、7人のアジア花嫁のライフヒストリー、ネットワークのキーパーソンとなった花嫁の事例、ベトナム籍花嫁からなる団体の社会活動などの調査を実施した。まず、7人のアジア花嫁のライフヒストリーに関する考察を踏まえて、以下のような結論を導き出した。

結婚した動機と過程から考えて、近年台湾と東南アジアおよび中国との間で、活発になった貿易関係と交流により、国際結婚を選択した動機は単なる経済的な要素ではなく、多様化している。実際に、結婚した動機と過程に関し、典型的な貧困脱出の目的で夫と結婚したカンボジア籍Kとベトナム籍Cの事例もあり、相手の家庭環境・経済事情と結婚後の生活を計算し、国際結婚の主導権を握ったインドネシア籍Gとタイ籍Mと中国籍WAの事例もあり、人生の逆転を図って、国際結婚を生存戦略として使用したベトナム籍HAの事例もあり、海外生活および台湾文化への憧れの元で、国際結婚を選択したベトナム籍CHの事例もある。本論文で取り上げたアジア花嫁の主体性の一端が明らかになったし、都市部における国際結婚の

人間文化研究 創刊号

多様化も示されている。

家族構成から考えて、台湾生活の適応に関して、台湾人家族と同居することに伴う複雑な人間関係による揉め事は最も深刻な問題の一つである。そして従来の農村のアジア花嫁は跡取りになる子孫を生み、高齢者の介護をする安価な再生産労働者とみなされて、大家族との同居を拒むことが困難である。これに対して、本論文で取り上げたアジア花嫁の事例は都市部の国際結婚であるゆえに、従来、家父長制が強い農村部の国際結婚とは大きく違い、多様化した家族構成や都市部の社会・生活環境という背景で、彼女たちを束縛する要素が少なく、それぞれの生存戦略を発揮する余地が大きくなる。都市部であるゆえに、タイ籍Mと中国籍WAは夫の親と同居しないという結婚条件で、嫁姑問題を回避する生存戦略を発揮することができた。台湾人家族との同居を拒否できないカンボジア籍Kとベトナム籍C、CHの3人は結婚当初、家事労働者同様の扱いを強いられた。しかし、カンボジア籍Kは夫との信頼関係を築いてから、インドネシア人ヘルパーを雇い、姑の介護など無償な家事労働から脱出ができた。もし、カンボジア籍Kが農村のアジア花嫁だったら、外国人ヘルパーの雇用という戦略を発揮できない。ベトナム籍Cの戦略成功の背景には、夫の信頼だけではなく、2世代住宅も重要な役割を果たしている。このような生存戦略は農村では使用することが困難である。ベトナム籍CH以外の6人の事例から、都市部の国際結婚は農村部の国際結婚よりも生存戦略が功を奏する可能性が大きく、主体性をより発揮しやすい環境に恵まれていることを明らかにした。

離婚した事例から考えて、彼女たちは離婚後の強制送還、ホスト国の国籍取得、経済的自立などの諸問題と直面し、一般のアジア花嫁より多大な困難を抱えている。本論文で取り上げた3人はベトナム籍CH以外、中国籍WAとベトナム籍HAは、すべて上記したような困難に直面したこと

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

がある。WA は真正面から DV を振るった夫と衝突せず、夫の周辺と近所で良好な人間関係を作り、地元のネットワークの活用により、困難を克服した。ベトナム籍 HA は台湾人交際相手の資金援助を取得し、夫の借金を肩代わりすることにより、中華民国籍を取得し、自分および子供の台湾在留問題を解決した。ベトナム籍 CH はホスト社会で築いてきた台湾人ネットワークを活用し、社長をはじめとする同僚の支援やベトナム姉妹会で知り合った同胞の励ましもあり、次第に離婚後の挫折から立ち上がった。子供の親権を取得できなかったアジア花嫁と比較すれば、CH が親権を取得できた背景には、離婚前にすでに安定した仕事を持ち、積極的にネットワークを築いてきたことである。この3人はそれぞれの主体性を発揮し、ホスト社会で築いた台湾人ネットワークと同胞ネットワークをうまく使い分け、強制送還を免れ、中華民国籍と子供の親権を取得することができ、ホスト社会で生き抜き、結婚生活が破綻したアジア花嫁に対する「弱者」というステレオタイプを覆した。

子育て問題の妊娠・出産の段階から考えて、一般的に早期妊娠がホスト社会での生活に馴染んでいないアジア花嫁に支障をもたらす。しかし、早期妊娠したインドネシア籍 G と中国籍 WA は核家族で暮らし、大家族との同居による揉め事を避けることができた。一方、出産と「坐月子」をめぐる困難に関して、ベトナム籍 HA は母国とのネットワークを利用し、母国にいる母親を呼び寄せ、新生児の世話などを任せた。そして経済的な余裕がない時期は息子をベトナムの両親に託すという生存戦略で乗り越えた。学齢期に入る段階では、中国語能力が不足しているアジア花嫁にとって、子どもの学業指導は最も悩まされる問題の一つである。家庭の経済的・社会的地位が「新台湾の子」の学力を左右し、「新台湾の子」の学力が低いという先入観はホスト社会では定着している。確かに家庭の経済力により、教育方針が大きく影響されている。経済状況が良好であるインドネシ

人間文化研究 創刊号

ア籍 G と CH は子供に進学塾に通わせ、優秀な成績を維持させた。子供を塾に通わせないベトナム籍 C は学校の環境をよく利用させ、学業指導の困難を乗り越えた。この三人を初めとする多くのアジア花嫁は子供の教育を自らの生存戦略の一つと考え、ホスト社会での不公平な立場からの脱出を目指した。学力が高い子供を育てることにより、ホスト社会で、子供の教育に無責任や無関心などのアジア花嫁に対する偏見を払拭することができた。そして、子供の立身出世により、自分の老後の生活を保障することができた。ただし、タイ籍 M と中国籍 WA のように家庭の経済に余裕がなく、既存の「アジア花嫁は教育に熱心ではない」というイメージに当てはまる女性もいる。7 人のアジア花嫁の中で、タイ籍 M と中国籍 WA 以外、家族構成と夫の経済力などに応じて、子育てと教育に関して異なる困難に直面しながら、それぞれ異なる生存戦略を工夫し克服してきた。

アジア花嫁のネットワークと社会活動に関する調査結果を踏まえて、ベトナム小吃店を起業した S と青果卸売業者と結婚したカンボジア籍 Y は、二人とも同胞同士におけるネットワークの拡大に貢献したことを明らかにした。この二人はさらに、地域社会の台湾人と同胞をつなぐ役割を発揮し、同胞のネットワークと地域社会のネットワークの結節点でもある。一方、高雄市ベトナム同郷会の社会活動により、相互扶助のシステムの拡大と台湾社会への適応の促進、アジア花嫁に対する偏見の是正、同胞のエンパワーメントの達成などが実現した。積極的に同胞を助ける幹部たちと自らホスト社会のネットワークを展開しようとするベトナム籍花嫁は、全員各々の主体性を発揮し、懸命にホスト社会で生き残ろうと頑張っていることが明らかになった。彼女たちの社会活動の最終目標はただ一つ、すなわち周縁化された立場からの脱出であり、ホスト社会における地位の向上である。

以上、高雄市在住のアジア花嫁に関する考察を踏まえて、本論文で取り上げた多くのアジア花嫁は単なるホスト社会で常に描かれているような援

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

助を待ち、「教化」すべきエスニック・グループではなく、ホスト社会で築いてきた台湾人および同胞ネットワークを巧みに使い分け、さまざまな困難を克服してきた、主体性を持った女性達であることを明らかにした。

アジア花嫁と台湾社会との共生のために、本論文の調査結果を踏まえて、政府と台湾社会、台湾人夫及び家族、アジア花嫁本人に、それぞれへの提言をまとめた。

政策の宣伝がまだ不十分である。多くのアジア花嫁は自身の権利に関する現行の政策を知らなくて、その恩恵を受けることができない。政府はアジア花嫁の利用状況に関する把握と政策の宣伝方法を改善すべきである。また、アジア花嫁とよく接触している役人および教育現場の担当者がアジア花嫁と「新台湾の子」に対する配慮を欠如している。そのため、政府は現場担当者を対象にする多文化教育の授業を実施すべきである。

調査結果から、少数の宗教団体のスタッフによる露骨な宗教勧誘に対するアジア花嫁の反感という事例が判明した。宗教団体がアジア花嫁を支援する際、勧誘の節度に注意すべきだ。また、民間団体がアジア花嫁をデモに参加させる場合、台湾人家族の感情を考えて、一般のアジア花嫁の立場への配慮も必要である。ただし、民間団体が率先して、台湾社会におけるアジア花嫁への支援活動を取り組み、中央政府と地方自治体よりも彼女らの生活適応の実態を把握していることは事実である。そのため、大多数の高雄市在住のアジア花嫁は日頃彼女たちの生活を支援している民間団体を評価し、感謝している。

アジア花嫁と「新台湾の子」に対する偏見は一般民衆の自文化中心主義およびマスメディアの過度な報道によるものである。アジア花嫁に対する一般民衆の固定観念を改善するためには、台湾人に多文化的価値観を養うことが必要である。異文化への理解と尊重を実践すると同時に、台湾民衆の世界観も自然と広がっていく。アジア花嫁に対して偏見をもっているマ

人間文化研究 創刊号

メディアの報道姿勢も修正すべきである。台湾社会に存在している高齢の親の介護、過疎地域の結婚難などはアジア花嫁たちの存在により解決できたという現状を踏まえて、ホスト社会で懸命に生きている多くのアジア花嫁に対して感謝すべきである。

国際結婚では、もし夫が最初に嫁姑問題など予想できる揉め事を避けるために、核家族か二世帯住宅という生活スタイルを選択すれば、結婚生活は相対的に円満な方向に向かっていく。多くのアジア花嫁は早期妊娠による生活の不適応が起こることが多いので、生活に馴染んだ後で妊娠する計画が望ましい。そして、台湾人家族は家族の一員としてアジア花嫁を認め、尊重すべきである。とくにまだ慣れていないアジア花嫁に対する配慮は不可欠である。

アジア花嫁は事前に台湾文化と中国語および台湾語の学習をしておく、早めに台湾生活に馴染むと考えられる。そして、本論文では、同胞同士の助け合いがホスト社会に適応していくために、非常に重要だということが明らかになった。アジア花嫁は、積極的にホスト社会で、同胞のネットワークと台湾人ネットワークの双方を築くべきだ。また、アジア花嫁のイベント参加に関して、台湾人家族の協力的な姿勢が求められている。単純労働に就くしかないという現状を脱出するため、中国語学習を継続するべきである。単なるアジア花嫁本人の学習意欲の向上だけではなく、周囲にいる台湾人家族の積極的な支援が非常に重要である。

本論文はアジア花嫁のライフヒストリーである質的調査の分析を重視して研究を進めたので、調査の中で実施した高雄市在住のベトナム籍花嫁45人の生活調査アンケートの結果を十分に生かしていない。今後は量的調査の成果を取り入れて、質的調査の限界を補い、より深くアジア花嫁の生活適応の実態に迫っていきたい。また、先行研究でよく取り上げられている母国への送金事情や育児支援のほかに、エスニック・ビジネスなど母国と

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

の繋がりに関する問題の解明は、今後の研究課題だと考える。台湾社会全体がアジア花嫁を受容できる多文化社会に向かって変わっていくために、アジア花嫁の生活適応を中心とする研究は極めて重要であり、今後も本論文の研究成果を踏まえて、アジア花嫁と台湾社会との共生に貢献できるように研究を深めて行きたい。

人間文化研究 創刊号

＜博士論文審査結果の要旨＞

論文提出者：徐 幼 恩

論文題目：台湾のアジア花嫁

——高雄市における生活適応を中心として——

学位申請の種類：甲（課程博士，比較文化学）

I 論文の要旨

1. 論文の課題

博士学位申請論文「台湾のアジア花嫁——高雄市における生活適応を中心として」において、学位申請者である徐幼恩氏（以下、著者とする）は、修士課程から一貫して取り組んできた、台湾男性と結婚したアジア女性の生活適応というテーマについて、2007年から継続してきた台湾の高雄市民区における人類学的なフィールドワークの成果にもとづき、実証的に議論を展開している。2008年度に提出した修士論文「台湾のアジア花嫁」で著者は、台湾の「アジア花嫁」の歴史と現状について概括的に論じているだけであったが、この博士学位申請論文では、高雄市に在住する7人のインフォーマントに対する詳細かつ深い聞き取り調査の結果を主要な資料として用い、彼女らが直面する生活適応上の諸問題を具体的に論じ、さらに台湾社会全体に対する提言をまとめている。台湾のマスメディアおよび研究者の多くが、彼女らを「弱者」または「被害者」として描く傾向があるのに対し、著者は、彼女らの主体性と生存戦略に焦点を当て、一括りにして論じることができない「アジア花嫁」の多様性を描くことに成功している。

世界中で家族のグローバル化が進展するとともに、「国際結婚」は人類学・社会学の分野で重要な研究テーマの一つとなっているので、著者の研

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

究はまさに時宜を得たものといえる。とくに台湾では1990年代以降、「国際結婚」の件数が急増し社会問題化するとともに、「アジア花嫁」は多くの台湾の研究者が取り組むテーマとなり、さまざまな角度から研究されている。研究者の多くが農村部の「アジア花嫁」に取り組み、「新台湾の子」と称される子どもの教育など個別の問題に焦点を当てるのに対して、著者は、高雄市三民区という都市部で調査を実施し、さらにライフヒストリーから彼女らの生活世界の全貌を明らかにしようと試みている。この点で、本論文は台湾の「アジア花嫁」に関するこれまでの先行研究とは違う特色を有している。

2. 論文の構成

博士学位申請論文の構成は以下の通りである。

序論

第1章 台湾におけるアジア花嫁

第2章 政府の政策と公益団体の支援

第3章 アジア花嫁のライフヒストリー

第4章 アジア花嫁のネットワーク

結論

なお、上記の本文に加えて、参考文献と付録資料がつき、全234頁（1頁に1200字）になっている。

3. 論文の内容

序論の第1節「研究の目的と方法」では、アジア花嫁の生活適応に焦点を当てて、彼女たちが単なる受け身の弱者ではなく、周辺化された立場を脱出しようと懸命に生きている能動的な行為者であることを明らかにしようとする、本論文の目的を述べている。研究方法としては、文献調査に加

人間文化研究 創刊号

え、高雄市三民区におけるアジア花嫁の聞き取り調査、とくにライフヒストリーの聞き取りが中心である。第2節「日本のアジア花嫁」では、日本のアジア花嫁に関する先行研究を紹介し、賽漢卓娜など一部の研究者を除いて、彼女たちの主体性や声が十分に描かれていないという先行研究の問題点を指摘している。第3節「台湾におけるアジア花嫁の先行研究」では、おもに台湾人研究者による先行研究を取り上げ、その研究対象の地域的偏りなどの問題点を明らかにしている。

第1章「台湾におけるアジア花嫁」の第1節「アジア花嫁の歴史」では、アジア花嫁に対するさまざまな呼称と定義を紹介し、彼女らが台湾社会で受けた偏見の背景を明らかにし、本論文で「アジア花嫁」という用語を選択した理由を述べている。続いて中国出身と東南アジア出身のアジア花嫁に分けて、それぞれの国際結婚の歴史とアジア花嫁の現状をまとめている。第2節「アジア花嫁の社会・経済的背景」では、「プッシュ・プル理論」をもとにして、受け入れ国と送り出し国の間に存在する社会的・経済的背景およびアジア花嫁の増加した諸要因を紹介している。第3節「高雄市のアジア花嫁」では、本論文の主な調査地である高雄市に焦点を当てて、その概況とアジア花嫁の現状、および主な調査地域である三民区におけるアジア花嫁の現状をまとめている。

第2章「政府の政策と公益団体の支援」では、アジア花嫁を一刻も早く台湾社会に溶け込ませるために、政府や民間団体がそれぞれ実施した支援活動の内容をまとめている。第1節「中央政府のアジア花嫁政策」では、アジア花嫁政策の具体的な内容と問題点を指摘している。第2節「高雄市における政策の実践と新移民センター」では、地方自治体である高雄市の支援体制およびアジア花嫁の支援を統括する新移民センターの成立の経緯などを整理している。第3節「高雄市の生活適応クラス」では、高雄市が主催する、生活適応を援助するためのクラスの現場と、生活適応クラスの

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

担当者から見たアジア花嫁に対する支援の問題点を論じ、さらに、主催するキリスト教団体の改善すべき点を指摘している。第4節「公益団体の支援」では、公益団体の支援活動に関して、「南洋台湾姉妹会」の活動経緯および高雄市のキリスト教団体の支援活動をまとめている。第2章では、以上述べたようなアジア花嫁政策の実行によって、台湾社会は確かに多くのアジア花嫁にとって生活しやすい社会になりつつあるが、政策宣伝の不足等のため、多くのアジア花嫁は自身の権利に関する現行の政策を知らず、その恩恵を受けることができない現状も明らかにした。また、公益団体の支援は、ある意味で政府と地方自治体のアジア花嫁政策に方向と見本を提示したという事実を明らかにした。

第3章「アジア花嫁のライフヒストリー」では、アジア花嫁の姿を明らかにするために、本人の語りを通して、彼女らが台湾社会で直面したさまざまな困難等を明らかにしている。この章に、本論文の中心となる資料が提示され、議論が展開されている。第1節「高雄市の7人のアジア花嫁」では、インフォーマントとなった高雄市在住の7人のアジア花嫁のプロフィールを紹介している。第2節「結婚が継続しているケース」では、結婚生活が継続しているタイ籍Mとカンボジア籍K、インドネシア籍G、ベトナム籍Cのライフヒストリーを取り上げている。海外移住労働者として台湾に来たタイ籍M以外、3人は結婚仲介業者の紹介を通して夫と知り合い、結婚をきっかけとして台湾に来た。これら4人の女性が、言語の壁と家庭内の人間関係、子育て、就職という問題に直面した際、どのように困難を乗り越えてきたかを明らかにしている。第3節「結婚が破綻したケース」では、結婚生活が破綻した中国籍WAとベトナム籍CHとHAのライフヒストリーを紹介している。台湾企業の中国およびベトナム進出とともに、国際結婚が増加した。中国籍WAとベトナム籍CHはまさにこのようなケースである。ベトナム籍HAは、台湾での移住労働をきっかけとして

人間文化研究 創刊号

台湾人男性と結婚した。それぞれの結婚生活が破綻するまでのプロセスと離婚をめぐる生存戦略、離婚後の自立をまとめ、分析している。第4節「まとめ」では、7人のアジア花嫁それぞれが取った生存戦略を論じている。第3章で著者は、7人のアジア花嫁の生存戦略の事例から、彼女らが単なる周辺化された弱者ではなく、自らさまざまなネットワークを使い困難を乗り越えてきた主体性を持つ女性であるという結論を出した。

第4章「アジア花嫁のネットワーク」では、前章と同様に、アジア花嫁の事例から、彼女らがホスト社会である台湾でどのように自分らのネットワークを展開してきたかを分析している。第1節「アジア花嫁の情報交換の場」では、アジア花嫁の情報交換の場を研究するために、「ベトナム小吃店（食堂）」と青果卸売業者の妻の事例を取り上げている。第2節「ベトナム籍花嫁の社会活動」では、同胞同士のネットワークの展開を考察するために、ベトナム籍花嫁からなる団体の社会活動を取り上げている。第3節「ベトナム籍花嫁を描いた演劇」では、ベトナム籍花嫁と台湾社会との共生を喚起するために上演されたベトナム籍花嫁を描いた演劇を紹介している。この章で著者は、ネットワークのキーパーソンであるアジア花嫁の事例およびベトナム籍花嫁の社会活動と演劇に託されているメッセージを通して、国際結婚に関して当事者であるアジア花嫁と台湾人夫をはじめとする台湾人家族、双方の理解と努力が必要であると同時に、アジア花嫁のネットワークが彼女らの生活適応において、きわめて重要な役割を果たしていることを明らかにした。

結論の第1節「アジア花嫁の生存戦略」では、7人のアジア花嫁の生存戦略と同胞ネットワークの活動から見た主体性を分析し、本論文の主目的である、アジア花嫁が能動的な行為者であることを明らかにしている。第2節「アジア花嫁と台湾社会との共生」では、アジア花嫁と台湾社会との共生のために、本論文で明らかにした調査結果を踏まえて、政府と民間団

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

体、台湾社会、台湾人夫と家族、アジア花嫁本人対して、それぞれの問題の解決に向けた提言をまとめている。第3節「総括と今後の研究課題」では、本論の内容を総括した上で、本論文の不足している点、および今後の研究課題をまとめている。

II 最終試験の結果報告

2014年2月10日に実施した最終試験の結果を報告する。主査に加え、東アジアの歴史を専門とする Billingsley 教授と青野教授が副査として最終試験に加わった。

まず本論文が、台湾における「アジア花嫁」の歴史から現状、とくに生活適応上の諸問題とそれを乗り越えるために彼女らが使った生存戦略を実証的に明らかにした「力作」であることは、審査にあたった全員が認める点である。著者が2008年度に提出した修士論文から質量ともに格段に進歩し、博士学位申請論文に相応しいレベルに達している。

著者が2007年以降、7人のインフォーマントとの間に築き上げた信頼関係（ラポール）は、多くの調査者にとって聞き出すことが難しい生活上の裏面までも含めて、鮮やかに7人の生活世界を描き上げることに成功している。聞き取り調査で得た資料にもとづき、具体的かつ詳細に「アジア花嫁」の主体性と生存戦略を議論している点が、この論文のもっとも優れた点である。とくに第3章第3節で取り上げている3人の女性の離婚事例は、表面的な聞き取り調査では決して聞き出せないような、配偶者以外の男性との関係なども含め、彼女らの自立に向けた生存戦略について具体的な資料にもとづき説得力のある議論を展開している。また、この論文の特筆すべき長所は、ある出来事を一面的に描くのではなく、常に多面的な記述を意識している点である。例を挙げれば、第3章第2節に描かれているカンボジア籍Kの夫婦関係において、Kの言葉だけでなく、Kの台湾人夫の意見

人間文化研究 創刊号

も取り上げることで、夫婦の関係が深みをもって記述されている。また、第4章第2節で取り上げられている「同郷会」の活動に関し、同胞に対する貢献など肯定すべき点のみならず、経費上の問題なども記述している。

本論文には、著者の2007年からの研究活動の成果が過不足なく盛り込まれている。7人の女性からライフヒストリーを聞き取るという研究手法のため、それぞれの女性の母国での生い立ちから台湾における現在の状況まで、彼女らの人生が生き生きと描かれている。この論文のユニークな特徴は、第3章で「結婚が継続しているケース」と「結婚が破綻したケース」に分けて、「アジア花嫁」のライフヒストリーを分析している点である。とくにベトナム籍CHの事例は、ベトナムでの夫との出会いから、夫の家族との同居時の姑との不和、夫の不倫による夫婦関係の破綻、そして離婚後の自立まで、長年にわたる一人のベトナム女性の生き方が聞き取り調査の結果から具体的に記述され、生存戦略の分析に実証性を与えている。

最後に結論の中で、研究成果にもとづき、「共生」に向けて、台湾の政府や自治体だけでなく国際結婚の当事者に至るまで、台湾社会のさまざまな関係者に対する具体的な「提言」をまとめていることは、この論文の意義として高く評価できる点である。

上記の点で、博士論文に相応しい内容を備えた論文になっている。しかしながら、いくつかの問題点も認められる。「国際結婚」に関する人類学・社会学の研究成果、とくに英語文献が十分に検討されていない点が指摘できる。より多くの文献を参照していれば、さらに本論文の理論的枠組みがしっかりと構築されたと考えられる。また、2人の審査委員から次のような問題点も指摘された。第一に、著者が7人のライフヒストリーから導き出した結論が、どこまで一般化できるかという問題である。この点は、ライフヒストリーという研究手法に固有の問題であると考えられる。著者は、台湾のマスメディアによる「アジア花嫁」のステレオタイプに対する一つ

博士論文の要旨および博士論文審査結果の要旨

の異議として、7人の女性の多様な生き方を取り上げたことを強調した。第二に、中華系と中華系でない女性との違いをもっと深く分析すべきであったという点である。この点について、著者は中華系の中における民族的差異（たとえば客家系と広東系の差異）が大きいという点を指摘した。第三に、結論の第1節で論じている「アジア花嫁」の主体性と、第2節でまとめている台湾社会への提言をどう結び付けるかという問題点である。さらに「公共性」および「排除と包摂」という理論的課題に対して、著者がどう答えるかという問題が与えられた。これは、著者の今後の研究課題として残された。第四に、参考文献の書き方に若干ミスが目立つ点である。

以上、徐幼恩氏が提出した博士学位申請論文「台湾のアジア花嫁——高雄市における生活適応を中心として」に関し口頭試問を行い、その内容を様々な観点から審査した。また、外国語能力についても論文の内容から確認できた。その結果、われわれ審査委員一同は一致して学位申請者徐幼恩氏が高度の研究能力と豊かな学識をもっていることを確認し、徐幼恩氏に対して博士（比較文化学）の学位を授与するに十分な資格があると判定した。

2014年2月10日

審査委員(主査)	小 池 誠
審査委員(副査)	Philip Billingsley
審査委員(副査)	青 野 正 明